

nakcazawa

『ジェンダー表現ガイドブック』の第1回プレゼン（崎山・清水・中井）に関するスレッドです。

高本恭吾

男性は女性のかawaiiさや、美しさといった「女性らしさ」に惹かれたり、女性も男性の力強さやかっこよさなどの「男らしさ」に惹かれることで恋が始まることも多い中で、「女性らしさ」や「男性らしさ」といった概念をなくすこと、つまりジェンダーレスというのは無理があるのではないかと思う。しかし、今回のプレゼンの写真の化粧品のように、女性らしいデザインから転換し、シンプルなデザインにすることで、「女性らしさ」を好まない人が新たな選択肢を提示したり、メンズメイクが登場したことで、「男らしさ」を求めない人の新しい選択肢が生まれたように、各自が自由に「らしさからの脱却」を選択できるというのは、ジェンダーという問題に対してとても良いアプローチの方法だと思った。

清水陸人

ジェンダーについて考えることが今まであまりなかったので良い経験になった。女性と男性の両方の問題を取り上げることで、考え方が広がったかなと思います。メディアだけの問題にするのは良くなかったかなと思いました。

籠谷郁吹

ジェンダーと言う、言葉に触れることがない日常だったので、しっかりと学び、理解することができてよかった。

増田光樹

報道やCM・昔の慣習によってジェンダーバイアスが植え付けられていたことが分かった。

育児で男性が活躍しない現状が問題視されているが、残業等の長時間労働が原因のひとつにあるので、労働環境の改善とジェンダーレスが関わっているという新しい発見ができた。

プレゼンの進行もスムーズで聞きやすかった。

梶田進太郎

自分にとってジェンダー問題は大学に入って初めて取り組んだ課題だったのでなんの偏見もなく授業に入れた。特に印象に残ったことは、炎上した CM のくだりであれだけ何個も CM を作って、完成後も検閲を繰り返しているプロの人達でさえ見抜けないジェンダーの問題があったということから、まだまだ自分たちには問題への意識が根付いておらずこれからも解決に向けて取り組むべき課題があるということが分かった。

尾崎星太

ジェンダーの問題は非常に重要であり、議論すべき課題である。しかし一般的に、政治と同様で議論することに少し抵抗を感じるセンシティブな話題であることも事実である。この議論をする上では、自身の思想を主張するだけでなく、問題の客観視と言葉選びが重要だと感じた。

中井 美裕

ジェンダーに関する問題は身近であるが難しい問題と改めて感じたので、ジェンダーバイアスの話から進めて、難しさをあまり感じないよう、考えやすいように努めました。ジェンダー問題が女性の問題だけでないこと、「ジェンダーレス」という言葉にあるように全ての人間に関する問題であることを理解してもらえるように発表することができたと思います。ただ、時間がかなり余ってしまったので、次のプレゼンは時間配分に気をつけます。

三木美裕理

ジェンダーについて考えると本当に日本は世界に比べて遅れてるんだなと毎回実感する。今回の授業で改めて日常でのジェンダー問題を見つけることができた。全体的にグループワークがしやすい問いが多く、もっと深掘りしても面白そうな内容ばかりだった。

川端 真由

炎上した CM の例を見た時に炎上した理由は分かりましたが、そこまで問題があるように思いませんでした。

ジェンダーの問題について意識することは大切ですが、これまでの男女に対する考えを完全に否定するのも違うかなと思い、塩梅が難しいと感じました。

新谷

ジェンダー問題という言葉は最近よく見かけるが、デリケートな問題で扱いが難しいように感じていた。炎上した広告から学ぶことは、昔の慣習から無意識のうちに男女で差があるという考えを根本に持つ人が多いという点だと思った。

崎山綾香

ジェンダー問題を発表する上で言葉選びが難しかったが、ゼミの皆でジェンダーについてを深く考える良い機会になったと思う。性別に対する偏見は身近にたくさんあるが、それらに対する人々の意識を変えていくのは極めて難しいと感じた。

白澤卓也

ジェンダー問題について今まで以上に深く考えるきっかけになって良かった。cm の例が興味深かった

金山恵大

ジェンダー問題という今まで聞いたことがある問題だったが、このような形での考え方をしたのは、初めてだったのでとても面白かった。

西川茉里

ジェンダー問題については以前から考えることが多かったので今回本を読むきっかけになって良かったです。

プレゼンでは、女性目線男性目線に別れて様々な思考がある事を実感出来ました。普通に生きている中で沢山のジェンダー問題があることも知れました。男女で別れてグループワークもしてみたいと思いました。

つちやよしき

ジェンダー差別とまでいかななくても、自分たちの思い込みや固定観念の中で男性・女性という属性のみで「こうして欲しい」、もっと直接的に「こうすべきだ」と考えてしまっていることが幾つもあるんだなと気付かされた。

「医学部受験で恣意的に女性や浪人生の点数を下げていた」という事件があったが、医学部受験だけでなく、会社での査定において大きな男女差があると指摘されていたり、ひどい場合には「女性は結婚や出産ですぐいなくなるから、独身で居続けるつもりだと公言している人以外はある程度で止めている」という人事がいたりすると聞いた。しかしながら、出産については現代の技術・社会通念においてはまだまだ女性によるものなのは事実である。ここで必要なのは、男性の育児休暇取得率の増加など、女性の直接的な地位向上のみならず、男性側のシステムにも抜本的な変化が必要なのではないかと思った。

もう一つジェンダー問題について現代の風潮として感じるものは、女性の地位向上を目指すというよりも、表現規制への意識が目立つということもある。「ジェンダー表現ガイドブック」と題された本でこのような話をするのも変なところではあるが、世界的に表現規制運動は盛んで、特にオーストラリアやヨーロッパ諸国では児童ポルノなどの取り締まりが強化されている。それらを受け、「ポルノ漫画の天国」と評される日本もそれに続き、国家としての人権意識を高めるべきだ、とする意見もある。その一方で、実際の性犯罪やジェンダー問題対策はいまいち進まないという事実がある。2017年に少女への性的暴行で逮捕された男が、女兒への性的暴力を描いた成人漫画作品を参考・模倣したと供述し、大きな話題となった事件があるなど、性的表現の規制の是非が盛んに議論されることの必要性は高まっているだろう。ハラスメント行為への問題意識が高まり、映画などで意味のないセクハラを当然のように描くのは問題ではないか？という指摘が上がっているのも素晴らしいと思う。しかしながら、再犯率の高い盗撮などの性犯罪への効果的な対策であったり、芸能界における「枕営業」のブラックボックスなどはあまり見直されていない。将来的なジェンダー意識の変化を期待できるかという点では、肉体的性差を

学校で性教育として教えることへのタブー視がまだまだ抜けず、重い生理痛に苦しむ女子に対して「他の人は平気なのにそんなに痛がるなんて、甘えてるんじゃないか？」と虐める生徒がいるなど、問題点が多いように感じる。

ジェンダー問題対策の中でも表現規制というものは、自主規制も含めたら、法律や条例・社内ルールなどにすぐ書くことができ、活動家にとって成果を上げやすい分野だという事実がある。しかし、現代の日本から何を無くすか、将来の日本に何を残すか、という意味で、実際の性犯罪と将来の性的格差の意識レベルでの是正をより一層強く進めるべきなのではないか、と考える。

nakcazawa

このテキストには随所に「偏見」「バイアス」「固定観念」「ステレオタイプ」という語が登場します。また「メディア」「男性中心主義」「性差別」「性の商品化」という語も頻繁に登場します。「男性中心主義」が強く支配するメディアが、「男らしさ」「女らしさ」という「偏見」「バイアス」「固定観念」「ステレオタイプ」をまき散らし、そのことが「男性中心主義」「性差別」の社会を追認・再生産し、「性の商品化」を助長してさえいることを、現役記者たち（多くは女性）が告発し、メディアに自己反省を促すとともに、そうした思考習慣に無意識のレベルで縛られている読者に気づきを与えようとしています。広い意味では、ポリティカル・コレクトネス（political correctness、政治的妥当性）——特定の言葉や所作に（人種、宗教、性別、職業、年齢などに関する）差別的な意味や誤解が含まれないように、政治的に（politically）適切な（correct）〔＝中立的な〕表現や用語を用いる態度や考え方のこと——に関する書物だと言えるでしょう。私たちの思考習慣に無意識のレベルで含まれる偏見は、言葉を通じてあらわれるので、言葉の使い方に敏感になることによって、そうした思考習慣を正していこう、というわけです。かつて「看護婦」と呼ばれていた職業が今日では「看護師」と呼ばれるようになっていきます。「婦」という漢字は女性を意味しますが、もちろんこの職業に従事するのは女性だけではありません。「女性らしい職業」という固定観念から自由になるための第一歩として、表現が変えられたわけです。英語では nurse で、性別に関する意味合いはありませんが、消防士は fireman から firefighter へ変更されました。man が男性を意味するので、そうした固定観念から自由な表現に改められたわけです。

この問題の本質は高本くんのコメントにあるように思います。つまり、「男らしさ」「女らしさ」という私たちの無意識の思考の習慣が、私たちの生き方の選択肢を狭めてしまっている——男性の看護師、女性の数学者など——ので、それ反省することによって選択肢をできるだけ広げよう、というわけです。皆さんも選択肢は少ないよりも多いほうがいいでしょう。「男らしさ」「女らしさ」をなくしてしまおう、という考え方ではありません。そこを誤解して、ジェンダー平等に拒絶反応を示す人たちがまだまだ多いのは、本当に残念なことです。

自分が日常的に使っている言葉を反省してみることは、無意識な偏見を意識化するうえでたいへん有益です。その意味で、この本の貢献が大きいと思います。ただ、前回の授業の最後でコメントしたように、偏見についての理解がすんなりとジェンダー平等の実行に結びつくか、というとそれがなかなか難しい。日本の現状の企業システムでは、男性社員が長時間残業や単身赴任を拒否することはまだまだ難しく、それを受け入れたとたんに、家事分担はまず実行不可能になります。私たちの働き方（雇用のあり方）がその実行を困難にしており、雇用のあり方は日本の企業システム・日本経済の状況に大きく左右されます。経済学部生ならではのジェンダー問題へのアプローチが必ずあると思いますので、そういった観点を大事にこの問題について考え続けてもらえたら、うれしく思います。